The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	平安文学における五行の象徴とその機能 ： 『土佐日記』と『竹取物語』をめぐって
Author(s)	アッタヤ, スワンラダー
Citation	詞林. 2010, 47, p. 1-15
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67609
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

平安文学における五行の象徴とその機能

――『土佐日記』と『竹取物語』をめぐって――

スワンラダー・アッタヤ

はじめに

五行とは人間の生活に必要とされる木・火・土・金・水の五つの元素で、その循環により万物が生成されるとする思想が中国の戦国時代から説かれた。五行思想では、五色（青・赤・黄・白・黒）、五時（春・夏・土用・秋・冬）、五方（東・南・中央・西・北）など、自然界や人間界のあらゆる物に五行が配されていると信じられている。日本古典文学の中にも五行思想の影響がよく見られ、五行が配されている物や、「五色」、「五方」などの言葉もよく出てくる。

本稿では、『土佐日記』と『竹取物語』を取り上げて、五行の象徴的な機能を考察していく。五行説は平安朝の人々の精神生活に大きな影響を与え、その影響は現在にも及んでいるものなので、五行思想を理解することには意義があると考えられる。また、平安文学に五行思想がどのような影響を及ぼしたかを考察することによって、五行を象徴的に使う文学的技巧や平安朝の人々の俗信や考え方を理解することにもつながると考える。

一　『土佐日記』における五色の機能

『土佐日記』は、紀貫之が土佐守の任期満ちて京へ上るまでの船旅を描いたもので、その内容は、故郷を慕う心、亡き娘への思い、風波や海賊の恐怖、京に帰る喜び、荒れた自邸を見る悲しさなど、さまざまなものが含まれている。作者は「悲し」や「喜ぶ」などのような言葉を使って直接自分の感情を伝えるだけではなく、色やその場面の風景などを通して象徴的に感情を表すこともある。

本節では、『土佐日記』における風景に着目し、特に五色の機能について考察する。都へ帰る喜び、都へ一緒に帰れない亡き娘への思い、荒れた自邸を見る悲しさ、「月」と「みやこ」との関連など、作者の気持ちとそれを象徴する風景の言葉や五色の機能について考察していく。

一・一　青色

『土佐日記』では、作者が京に近づく時、青い木や明るい春の風景が頻繁に描かれる。まず、松の木の描写を見よう。

①九日のつとめて、大湊より、奈半の泊を追はむとて、漕ぎ出でけり。…宇多の松原を行き過ぐ。その松の数いくそばく、幾千歳経たりと知らず。（二五頁）

②二十二日。昨夜の泊より、異泊を追ひて行く。…

漕ぎて行く船にて見ればあしひきの山さへ行くを松は知らずや（三六頁）

③五日。今日、からくして、和泉の灘より小津の泊を追ふ。松原、目もはるばるなり。…

行けどなほ行きやられぬは妹が績む小津の浦なる岸の松原（四五頁）

①―③はすべて天気がよい出航できる日の場面である。傍線部から分かるように、これらの場面には松の木の風景がよく描かれる。次に都に近づく作者の喜びが描かれている場面を見よう。

④船引き上るに、渚の院といふところを見つつ行く。…しりへなる岡には、松の木どもあり。中の庭には、梅の花咲けり。…「世の中に絶えて桜の咲かざらば春の心はのどけからまし」…みやこの近づくを喜びつつ上る。（五〇頁）

⑤山崎の橋見ゆ。うれしきことかぎりなし。ここに、相応寺のほとりに、しばし船をとどめて、とかく定むることあり。この寺の岸ほとりに、柳多くあり。…

さざれ波寄するあやをば青柳の影の糸して織るかとぞ見る（五二頁）

④と⑤の傍線部のように、都に近づく作者の喜びが描かれている場面では、青柳、梅、桜など春の木がたくさん描かれている。『文学シンボル事典』（A Dictionary of Literary Symbols）によると、青色は活気や春を表す色で、希望や喜びなどを象徴する。[1] そうだとしたら、天気のよい出航できる日に描かれている青い松の風景や、都に近づく時の青柳と春の風景は、早く都へ帰りたい作者の喜びを表しているのではないかと考えられる。

五行	木	火	土	金	水
五色	青	赤	黄	白	黒
五方	東	南	中	西	北
五時	春	夏	土用	秋	冬
五情	喜	楽	欲	怒	哀
五志	怒	喜・笑	思・慮	悲	恐

色に関しては、古代日本は中国の影響を受け、日本文学の中によく見出せる「五色」というのも中国の五行思想の影響から来たものである。五行思想では、色の他に、方角や季節など、あ

らゆる物に五行が配されていると信じられている。五行が配されている物の一部を前頁に表で示す。

この表から分かるように、「青」と「春」は同じように木行が配されている。そして、五情の中で木行が配されているのは「喜」である。つまり、「青」と「春」と「喜」は木行が配されているという共通点によってつながっているのである。したがって、青い木と春の風景が、都への旅が進む喜び、都に近づく作者の喜びを象徴するということが可能なのである。

都に近づく作者の喜びを表す場面には、青い木と春の風景の他に、「東」という言葉が出てくることもある。

⑥幣の東へ散れば、楫取の申して奉る言は、「この幣の散る方に、御船すみやかに漕がしめたまへ」と申して奉る。…このあひだに、風のよければ、楫取いたく誇りて、船に帆上げなど、喜ぶ。その音を聞きて、童も媼も、いつしかとし思へばにやあらむ、いたく喜ぶ。（三八頁）

⑦東の方に、山の横ほれるを見て、人に問へば、「八幡の宮」といふ。これを聞きて、喜びて、人々拝み奉る。（五二頁）

⑥では、風が東へ吹いているので、船の人々が喜んでいる。この旅は土佐から京都へ向かうので、西から東への旅である。東は目的地の方角なので、東へ吹く風はこの旅に対し、いい風だから、皆が喜んでいるのである。そして、次の⑦では、東の方に石清水神社を見た作者は都に近づいたことを喜んでいる。作者の喜びを描くこの場面にも「東」という言葉が使われているのである。五行の図表を見ると、「東」いう方角も「青」と「春」と同じように木行が配当されているものだと分かる。すると、⑥⑦の「東」も「喜」を象徴するのだと考えられる。

このように見てくると、青い木と春の風景と東の方角、つまり木行が配されるものは、それぞれ都に近づく作者の喜びを象徴するのだと考えられる。それでは、逆に、旅の障害がある日の作者の不快感を象徴するのはどのようなものかを次に見よう。

一・二　黒色

まず、旅の障害がある日の場面を見る。

①「黒き雲にはかに出で来ぬ。風吹きぬべし。御船返してむ」といひて船返る。このあひだに、雨降りぬ。いとわびし。（三二頁）

②黒鳥といふ鳥、岩の上に集まり居り。その岩のもとに、白波白くうち寄す。楫取のいふやう、「黒鳥のもとに、白き波を寄す」とぞいふ。…船君なる人、波を見て、国よりはじめて、海賊報いせむといふなることを思ふうへに、海のまた恐ろしければ、頭もみな白けぬ。（三五頁）

③二十三日。日照りて、曇りぬ。このわたり、海賊の恐り

あり、といへば、神仏を祈る。　（三七頁）

④二十六日。まことにやあらむ、海賊追ふ、といへば、夜中ばかりより船を出だして漕ぎ来る。　（三七頁）

⑤三十日。雨風吹かず。海賊は、夜歩きせざなりと聞きて、夜中ばかりに船を出だして、阿波の水門をわたる。　（四一頁）

①は黒い雲、そして②は海賊のことだが、ここに「黒」という言葉がよく現れるのが見える。『文学シンボル事典』によると、黒色は不快・不吉を表す。[2]『土佐日記』では、海賊のことを言う場面には、黒や暗いイメージのある言葉がよく出てくる。④⑤⑥にも「曇り」や「夜中」など暗いイメージのある言葉が出てくる。海賊に言及する場面で暗いイメージの言葉が出てこないのは、次の⑥の場面しかない。

⑥二十五日。楫取らの、「北風悪し」といへば、船出ださず。海賊追ひ来、といふこと、絶えず聞こゆ。　（三七頁）

しかし、この場面には、暗いイメージの言葉はないが、「北風」という言葉が出てくる。五行の図表を見ると、「北」という方角も「黒」と同じように水行が配されているものだと分かる。この場面は「黒」の代わりに「北」という言葉が使われて、旅の障害である「北風」と「海賊」に対する作者の不快感を表しているのだと考えられる。また、五行の図表を見ると、「恐れ」という感情も「黒」と「北」と同じように水行が配されている物なので、「黒」と「北」と「恐れ」の間につながりがある。つまり、「黒」と「北」は、波風や海賊に対する作者の恐怖を象徴しているのである。

五行の図表から、水行が配されている物に「黒」、「北」、「恐れ」の他に、「哀れ」という感情も含まれていると見られる。『土佐日記』で、「哀れ」という言葉が出てくるのは、次の⑦の作者が都に到着して荒れた自宅を見た場面である。

⑦夜更けて来れば、ところどころも見えず。京に入りたちてうれし。…池めいて窪まり、水つけるところあり。ほとりに松もありき。五年六年のうちに、千歳や過ぎにけむ、かたへはなくなりにけり。今生ひたるぞまじれる。おほかたの、みな荒れにたれば、「あはれ」とぞ、人々いふ。　（五四頁）

傍線部のように、作者は夜更けに自宅に着く。また、この場面に池の水の描写もある。この場面の暗さと池の「水」は、水行が配当されている「哀れ」という感情を象徴するのではないかと考えられる。

さらに、この場面には松の木の描写がある。前述のように、松の木は作者の喜びを象徴するものとして使われている。この場面の松は、やっと自宅に辿り着いた作者の喜びを象徴するのだと考えられる。しかし、「かたへはなくなりにけり」とあるように、松の木は半分なくなってしまった。松の木がなくなったことは、「喜び」の逆の感情、つまり、「悲しさ」を表していると思われる。また、「松」は「長寿」をも象徴

するので、松の木がなくなったことはその逆、短命で亡くなってしまった、作者の娘のことを象徴するのだと考えられる。つまり、この場面では、自宅に辿り着いた作者の喜び、荒れた自宅に対する哀れ、亡くなった娘のことに対する悲しさなど、作者のさまざまな思いが風景を通して表されているのである。

一・三　白色

作者は船から見た様々な景色を描いたが、一番よく描かれたものは白波である。

①七日になりぬ。同じ港にあり。今日は白馬を思へど、かひなし。ただ、波の白きのみぞ見ゆる。（二一一頁）

②行く先に立つ白波の声よりもおくれて泣かむわれやまさらむ（二一三頁）

③霜だにも置かぬかたぞといふなれど波の中には雪ぞ降りける（三一一頁）

④立つ波を雪か花かと吹く風ぞ寄せつつ人をはかるべらなる（三三三頁）

⑤わが髪の雪と磯辺の白波といづれまされり沖つ島守（三三六頁）

①―④の傍線部のように、作者は白波について描き、その白波を雪か白い花のように見立てている。そして、⑤では、自分の髪の毛の白さと白波とどちらがまさって白いかと言っている。波風と海賊のせいで苦しんだ作者は自分の髪の毛が船旅の苦しさで白色に変わったと言ったのである。『中国文学象徴辞典』（A Dictionary of Chinese Symbols）によると、「白」は苦しさや悲嘆を象徴する。[3] 海で船旅をしている間、「白」はこの日記に何回も出てくるが、海上の旅が終わって川口に入ったあと、「白」はこの日記にはまったく出てこない。それで、この日記では、「白」は海上の旅の苦しさを象徴するものとして使われているのではないかと考えられる。

白波の他に、次の⑥のように、「白玉」という言葉も出ている。

⑥　忘れ貝拾ひしもせじ白玉を恋ふるをだにもかたみと思はむ

となむいへる。女子のためには、親、幼くなりぬべし。（四四頁）

ここでは、作者は忘れ貝を拾わず、娘の形見として白玉を拾うと言っている。これについて、娘の美しさを白玉に喩えているという解釈があるが、五行の図表を見ると、「悲し」は「白」と同じように金行が配されているものなので、「白」と「悲し」とはつながりがあり、また、『中国文学象徴辞典』によると、「白」は悲嘆を象徴する色なので、この場面の「白玉」は亡き娘のことに対する悲しさを表しているのではないかと考えられる。「悲し」は亡き娘に対する作者の思いを表す言葉であることは、次の⑦と⑧に明らかに見える。

⑦京へ帰るに、女子のなきのみぞ悲しび恋ふる。…
　みやこへと思ふをものかなしきはかへらぬ人のあればなりけり　（十八頁）

⑧この家にて生まれし女子の、もろともに帰らねば、いかがは悲しき。船人も、みな子たかりてののしる。かかるうちに、なほ、悲しきに堪へずして、　（五五頁）

このように、⑥の「白玉」は娘の美しさの他に、亡き娘に対する悲しさをも象徴しているのだと考えられる。作者が忘れ貝ではなく、白玉を選んだのは、亡き娘のことを忘れたくない、自分が悲しさで苦しんでいてもいつまでも娘のことを思い続けたいという作者の思いを表しているのだと思う。

一・四　赤色

『土佐日記』には、「赤」は二回しか出てこない。一回目は次の①の女性たちが沐浴をする場面であり、そして、二回目は②の「五色」が表れる場面である。

①女これかれ、沐浴などせむとて、あたりのよろしきところに下りて行く。…十日あまりなれば、月おもしろし。船に乗り始めし日より、船には紅濃く、よき衣着ず。それは、海の神に怖ぢてといひて、何の葦蔭にことづけて、老海鼠のつまの貽鮎、鮎鮑をぞ、心にもあらぬ脛にあげて見せける。　（二九頁）

②黒崎の松原を経て行く。ところの名は黒く、松の色は青く、磯の波は雪のごとくに、貝の色は蘇芳に、五色にいま一色ぞ足らぬ。　（四二頁）

①には、赤い衣を着れば、海の神を刺激して、魅入られてしまうという俗信が見られる。『中国文学象徴辞典』によると、「赤」は「青」と同じように「活気」を表す色で、また、美しい女性の赤い唇を連想するため、女性を象徴する色としてよく使われる。また、「裸」という意味もあり、例えば、「赤ん坊」と言うと、乳児の裸の姿が頭の中に浮かぶ。[4]『土佐日記』で、最初に赤色が出てくるのは、①の女性の入浴の場面で、この場面に描かれている貽鮎や鮑などについては、新編日本古典文学全集の頭注に、「老海鼠のつまの貽鮎」と「鮎鮑」は「女性の象徴の喩え」という解釈がある。[5]また、②の「貝の色は蘇芳」とあるように、貝について言うこの場面にも、また赤色が出てくる。

まとめて言うと、『土佐日記』では、赤色はすべて、女性、あるいは、貝類など女性を象徴するものを言う場面にしか出てこないのである。また、赤い衣を着れば、海の神を刺激して、魅入られてしまうという俗信から、赤色は海の神の好きな色、喜びの色だと分かる。

一・五　黄色

『土佐日記』には、「黄色」が出てこないが、「五色」という言葉が一回出てくる。

①黒崎の松原を経て行く。ところの名は黒く、松の色は青く、磯の波は雪のごとくに、貝の色は蘇芳に、五色にいま一色ぞ足らぬ。（四二頁）

傍線部の「五色にいま一色ぞ足らぬ」については、新編日本古典文学全集の頭注に、「五色とは青・黄・赤・白・黒。ここで足りないのは黄」という解釈がある。[6] 五行思想では、黄色は土行が配される色で、天国の方角である中央を象徴し、また、帝国を統治する皇帝の色としても使われる。この場面では、作者は黄色を欠くことを言うことによって都へ早く帰りたい自分の思いを表しているのではないかと思う。なぜなら、都は国の中央で、天皇が住んでいるところなので、中央と天皇を象徴する黄色とつながりがあるからである。それでは、この場面に同時に出てくる五色は何か象徴的な意味があるのではないか。

この場面は作者がようやく和泉で本州にたどり着いた場面である。ようやく本州にたどり着き、都への旅はあと少しだけなので、喜ばしいことである。ここで青と赤は作者の喜びを象徴するのだと考えられる。けれども、まだ都に着かず、旅の途中なので、作者はこれからもまだ船旅で苦しみ悩みつづけなければならないため、ここで白と黒は旅の苦しさと障害を象徴する。そして、黄色を欠くことはまだ都に着いていないことを象徴すると考えられる。つまり、この場面に出てくる「五色」は、喜びや不安や都への思いなど、作者のさまざまな思いを象徴しているのだと考えられる。

作者が都にたどり着いた場面は月が明るく照っている場面である。

②夜になして、京には、入らむと思へば、急ぎしもせぬほどに、月出でぬ。桂川、月の明きにぞわたる。（五四頁）

ここで作者は夜になるのを待ってから京に入ろうとする。新編日本古典文学全集の頭注に、「一行の入京の模様が人々の話題になるのをできるだけ避けようとしたか」という解釈がある。[7] しかし、その入京が月が明るく照っているころに描かれることについては、何か象徴的な意味がないだろうか。

『土佐日記』では、都を偲ぶ歌がいくつかあり、その中には次の③のように「月」をよむ歌もある。

③みやこにて山の端に見し月なれど波より出でて波にこそ入れ（三五頁）

「月」と「みやこ」との関連を表す例として、『竹取物語』のかぐや姫が言う「月の都」はとても有名で、他の物語の中にも出てくる。例えば、『源氏物語』では、出家を決意した浮舟が月を眺めて棄て去った世界を「月のみやこ」と呼んでいる。

④われかくてうき世の中にめぐるとも誰かは知らむ月のみやこに（日本古典文学全集『源氏物語』手習、二九一頁）

これについて、今井源衛氏は「浮舟が月明の夜、「つくづくとうちながめ」るのは、かぐや姫の姿のままであり、浮舟

の「われかくて」の歌の意も、単に「月の都では、私がこうしているとは誰も知るまい」の意だけではなく、おそらくは、『竹取物語』の「月の都の人にて、父母あり」という文脈をふまえてその内容を汲み取るべきである。」と論じている。[8]つまり、『竹取物語』は他の平安文学の作品に影響を及ぼすのである。『土佐日記』は『竹取物語』の少しあとに書かれたものであるし、『源氏物語』絵合巻には、実在したかどうかは不明であるが、「絵は巨勢相覧、手は紀貫之書けり」という『竹取物語』の物語絵も登場する。これらのことから、『土佐日記』は『竹取物語』に影響を受けている可能性が高い。それで、作者の入京が月が明るく照っているころに設定されるのは、作者が『竹取物語』のように月と都との関連をつけるためなのだとも考えられる。

また、作者がまだ船旅をしているころ、長い間出航できない状態の後、そろそろ出航できるようになる時に、月の描写がよく出てくる。

⑤（二十九日～八日は出航しなかった）八日。さはることありて、なほ同じところなり。今宵、月は海にぞ入る。…九日のつとめて、大湊より、奈半の泊を追はむとて、漕ぎ出でけり。（二四頁）

⑥（十四日～十六日は出航しなかった）十七日。曇れる雲なくなりて、暁月夜、いともおもしろければ、船を出だして漕ぎ行く。（三一頁）

⑦（十八日～二十日は出航しなかった）二十日。昨日のやうなれば、船出ださず。…二十日の夜の月出でにけり。…二十一日。卯の時ばかりに船出だす。（三三頁）

⑤では、十二月二十九日から一月八日まで長い間出航しなかった後、八日の夜に月の描写が出てくると、翌日の朝は天気がよくて出航できるようになる。次の⑥と⑦も同じように、長い間出航できない状態の後、月の描写が出てくると、まもなく出航する場面になるのである。このように、「月」は都へ帰れるしるし、旅が進むしるしのように使われていると見える。つまり、月と都との関連はここにも見られるのである。

以上、『土佐日記』における風景、特に五色の機能について考察してきた。『土佐日記』は五行思想の影響を受けており、五行に配される五色がそれぞれ作者の気持ちや旅のありさまを表すことに象徴的に使われていることが分かる。また、『竹取物語』の影響で月と都も関連づけられているようである。それでは、『土佐日記』に影響を及ぼす『竹取物語』の中にも五行の象徴が見出せるのではないかということを次節に見る。

二　『竹取物語』における五人求婚者と五行の象徴

『竹取物語』の求婚者の数について、稲賀敬二氏の論稿がある。氏は「源氏物語の絵合巻の解釈に従うことにして、一

条天皇時代には既に求婚者五人の物語が存在したとした上で、同時に求婚者四人の物語も流通していた。求婚者四人、五人の物語の他に、『今昔物語』巻三が伝える〈求婚者三人、難題別問題〉というかたちも平安時代には確かに存在した。」と論じている。[8] 求婚者三人、四人、五人の『竹取物語』がある。その中で求婚者五人の『竹取物語』は、求婚者の数が五行と同じく「五」であるから、五人の求婚者と五行とは何かつながりがあるのではないかと考えられる。

本節では、求婚者五人の物語における五行の象徴に着目し、一人一人の求婚者と五行のつながりを考察していく。そして、人間界の万物を生成する五行とつながりがあることによって、何かが暗示されているのではないかという点について考察してみたい。

二・一　石作の皇子

石作の皇子は「仏の御石の鉢といふ物あり。それを取りて賜へ」という結婚の条件を出された。しかし、「天竺に二つとなき鉢を、百千万里のほど行きたりとも、いかでか取るべき」と思って、天竺には行かずに山寺に三年籠もり、賓頭盧の鉢を仏の御鉢と偽って歌とともに差し出した。

①石作の皇子は、心のしたくある人にて、天竺に二つとなき鉢を、百千万里のほど行きたりとも、いかでか取るべきと思ひて、…三年ばかり、大和の国十市の郡にある山寺に賓頭盧の前なる鉢の、ひた黒に墨つきたるを取りて、錦の袋に入れて、作り花の枝につけて、かぐや姫の家に持て来て、見せければ、かぐや姫、あやしがりて見れば、鉢の中に文あり。ひろげて見れば、

海山の道に心をつくしはてないしのはちの涙ながれき　（一二五頁）

石作の皇子が持ってきたのは賓頭盧の前にある黒色の鉢だった。しかし、かぐや姫は石作の皇子の嘘を見抜き、次の歌を返した。

②置く露の光をだにもやどさまし小倉の山にて何もとめけむ　（一二六頁）

石作の皇子が持ってきた鉢が光っていないことから、「小倉の山」に掛けられた「暗い」が導き出されているのである。かぐや姫は石作の皇子が山寺に籠もっていたことを知っているようである。しかし、石作の皇子は恥を捨て、次の③の歌を送ってかぐや姫に求婚するが、結果はかぐや姫の返歌さえなく、求婚が断ち切られる。

③白山にあへば光の失するかとはちを捨てても頼まるるかな　（一二六頁）

「白山」は美しいかぐや姫を白い雪山になぞらえて、その美しさを強調する言葉である。二人の贈答歌を見ると、かぐや姫は「白山」という言葉で美しさが強調されるのに対し、一方の石作の皇子は「黒」や「暗い」という言葉で強調され

ていることが分かる。五行説では、「黒」は「水行」が配されている色なので、石作の皇子は「水行」と関連づけられているのではないかと考えられる。また、かぐや姫の美しさを白い雪山になぞらえることで「冬」が連想される。「冬」も「黒」と同じように「水行」が配されているものなのである。石作の皇子とかぐや姫との贈答歌の場面はどの季節に設定されているかは本文には記されていないが、①の場面では、石作の皇子が「海山」の歌を「作り花の枝」につけてかぐや姫に贈った。しかし、石作の皇子は本物の花の枝ではなく、作り花の枝を用いた。このように、その時の季節は咲く花がない冬の季節なのだとも考えられる。

まとめていうと、石作の皇子の物語には、「黒」や「冬」など「水行」とかかわったものが存在するので、皇子の場合は「水行」とつながりがあるのだと考えられる。

二・二　くらもちの皇子

くらもちの皇子は「銀を根とし、金を茎とし、白き玉を実として立てる木」という題を出された。

①銀を根とし、金を茎とし、白き玉を実として立てる木あり。それ一枝折りて賜はらむ。　（二四頁）

「白」は「金行」が配されている色だし、皇子が出された題は「銀」の根、「金」の茎がある木なので、くらもちの皇子の場合は「金行」とつながりがあるように見える。くらもちの皇子は六人の鍛冶工に偽物の玉の枝を作らせて、かぐや姫に偽物の玉の枝を差し出し、偽りの苦労談を語る。その偽りの苦労談の中にも、次の②に見えるように、「銀」と「金」という言葉がまた出てくる。

②天人のよそほひしたる女、山の中よりいで来て、銀の金鋺を持ちて、水を汲み歩く。…金、銀、瑠璃色の水、山より流れいでたり。　（三二頁）

「銀」と「金」という言葉がよく出てくることから、くらもちの皇子の物語は「金行」と関連があると考えられる。また、くらもちの皇子の偽りの苦労談によると、皇子は二月十日に出発し、五百日で蓬莱の山に辿り着き、それから、四百余日で都に帰ってきたという。

③一昨々年の二月の十日ごろに、難波より船に乗りて、…五百日といふ辰の時ばかりに、海のなかに、はつかに山見ゆ。…四百余日になむ、まうで来にし。　（三一頁）

二月十日に出発して五百日で蓬莱の山に到着するというくらもちの皇子の話にしたがって旧暦で数えてみると、皇子が蓬莱の山に到着するのは翌年の七月のころになる。そして、あと四百余日で都に到着するので、都に到着するのは次の年の八月の末ごろか九月の初めごろになる。都に到着すると、かぐや姫のところに直接来たという皇子の話によれば、くらもちの皇子がかぐや姫のところに来て偽りの苦労談をする場面は八月の末ごろか九月なのである。旧暦では、七月から九

月までは「秋」なので、くらもちの皇子がかぐや姫のところに偽物の玉の枝を持って来て偽りの苦労談をする場面は「秋」に設定されていることが分かる。「秋」も「白」と同じように「金行」が配されているものなので、くらもちの皇子の物語には、「金行」が配されるものがよく存在すると見られる。

くらもちの皇子の物語には「銀」や「金」という言葉がよく出てくること、皇子が出された題は「白い」玉の実がある木であること、偽物の玉の枝を持って来て偽りの苦労談をする場面は「秋」に設定されていることから、くらもちの皇子の場合は「金行」とつながりがあるのだと考えられる。

二・三　右大臣阿倍御主人

右大臣阿倍御主人は「唐土にある火鼠の皮衣を賜へ」という条件を出された。

①いま一人には、「唐土にある火鼠の皮衣を賜へ」。（二四頁）

火鼠は中国の想像上の動物で、南方の火山に産する。「南方」は「火行」が配されている方角であり、阿倍の右大臣がもらった題は「火鼠の皮衣」なので、阿倍の右大臣の場合は「火行」とつながりがあると考えられる。

『竹取物語』の火鼠の皮衣について、奥津春雄氏は「これは中国古代の伝説上の動物・火鼠と、物語成立当時流行していた貂裘に想を得て、実際に九世紀後半には高位の者だけに使用が制限されていた、渤海渡りの黒貂の裘に、当時火色と呼ばれた深紅色のイメージを加えて空想化、神秘化させ、遥かに鮮美で貴重な火鼠の裘とした点に特徴がある。」と論じている。[10] 阿部の右大臣は唐土の貿易船の王けいという人に手紙を出して、火鼠の皮衣を購求した。物を手に入れると、かぐや姫のところにすぐ持って来て次の歌を詠んだ。

②かぎりなき思ひに焼けぬ皮衣袂かわきて今日こそは着め（四〇頁）

「思ひ」の「ひ」を「火」にかけて、かぐや姫への思いとともに、火に燃えない火鼠の皮衣のことを言っているのである。かぐや姫は阿部の右大臣が持って来た皮衣が本物かどうかを確かめるために、その皮衣を焼いてみた。すると、その皮衣はめらめらと焼けてしまった。

③この皮衣は、火に焼かむに、焼けずはこそ、まことならめと思ひて、人のいふことにも負けめ。…火の中にうちくべて焼かせたまふに、めらめらと焼けぬ。（四一頁）

かぐや姫は大臣が詠んだ歌の返歌を、皮衣が入れてあった箱に入れて返した。燃えると分かっていたら焼いたりしなかっただろうにという返歌である。

④名残りなく燃ゆと知りせば皮衣思ひのほかにおきて見ましを（四一頁）

この歌もまた「思ひ」の「ひ」に「火」をかけているので

ある。結局大臣がかぐや姫と結婚できなかったので、世間の人々はうわさを言う。

⑤皮は、火にくべて焼きたりしかば、めらめらと焼けにしかば、かぐや姫あひたまはず。（四二頁）

このように見てくると、右大臣阿倍御主人の物語には、「火」や「焼」という言葉が何回も繰り返して出てくることが分かる。このように、阿倍の右大臣の場合は「火行」とつながりがあるのだと考えられる。

二・四　大伴御行の大納言

大伴御行の大納言は「龍の頸に五色に光る玉あり。それを取りて賜へ。」という結婚の条件を出された。

①大伴の大納言には、「龍の頸に五色に光る玉あり。それを取りて賜へ」。（二四頁）

五行説では、龍と言うと、東方に配する四神の一つである青竜が思い出される。「東方」と「青」はそれぞれ「木行」が配されている物なので、大伴の大納言の物語には「木行」とかかわった物が存在すると見られる。

大伴御行の大納言は「龍の頸の玉」を手に入れるために海上の旅をしたが、暴風のせいで結局失敗する。船旅で苦労した大納言は風病にひどくかかった人のようになり、腹はたいそうふくれ、両目は李を二つつけたように真っ赤になっている。

②風いと重き人にて、腹いとふくれ、こなたかなたの目には、李を二つつけたるやうなり。これを見たてまつりてぞ、国の司も、ほほゑみたる。（四八頁）

③「大伴の大納言は、龍の頸の玉や取りておはしたる」、「いな、さもあらず。御眼二つに、李のやうなる玉をぞ添へていましたる」といひければ、（四九頁）

大納言の両目が「李」を二つつけたようになっていることは、②と③に見られるように二回も語られている。実は「李」も「春」を示すものなのである。例えば、次の『古今和歌集』の歌を見てみよう。

④今いくか春しなければうぐひすもものはながめて思ふべらなり（『古今和歌集』四二八）

この歌は物の名という技巧を使って、「鶯」と「李」を用いて「春」の風景を表している。「李」は「春」を象徴するものであることは明らかなのである。

このように見てくると、大伴御行の大納言の物語には「春」を象徴するものがよく出てくることが分かる。また、前述のように、大納言が出された題は「龍の頸の玉」で、それは「東方」に配する「青龍」を連想させる。「東」も「青」も「春」と同じように「木行」が配されているものなので、大伴御行の大納言の場合は「木行」とつながりがあるのだと考えられる。

二・五　中納言石上麿足

中納言石上麿足は「燕の持たる子安の貝」という題を出された。

①石上の中納言には、「燕の持たる子安の貝取りて賜へ」。（二四頁）

「燕」は春を表すものとしてよく知られているが、日本には春に飛来し、秋に南方に去るので、季節の変り目を表すとも見られる。和歌の中でも、燕の春飛来と秋飛去を詠む歌が多い。次の②と③の歌もその例である。

②春をこふる心にいかがつばくらめかへる野中の秋のゆふ暮　（『夫木和歌抄』一〇五五）

③秋風にかへる心はつばくらめ初かりがねの春やしるらん　（『夫木和歌抄』五五五四）

このように、燕は季節変化を表すものだと分かる。五行説では、季節変化、季節の変り目を象徴するのは「土行」なので、中納言石上麿足の物語には「土行」とかかわった物が存在すると見られる。

「土行」が配される方角は「中」である。中納言石上麿足の物語の中には、「中」を表すものが多く存在するようである。まず、石上麿足の官職の地位は「中納言」で、「中」という語が入っている。また、中納言の物語には、ある物がある物の中に入っている光景が多い。例えば、次の④の場面である。中納言が燕の子安貝を取るために、綱のついた荒籠に人をのせて燕の巣に引きあげる。それも籠の中に人が入っている光景である。

④荒籠に人をのぼせて、吊り上げさせて、燕の巣に手をさし入れさせてさぐるに、「物もなし」と申すに、中納言、「悪しくさぐればなきなり」と腹立ちて、「誰ばかりおぼえむに」とて、「我のぼりてさぐらむ」とのたまひて、籠に乗りて、吊られのぼりてうかがひたまへるに、（五三頁）

中納言自身もその籠に乗って子安貝をさぐった。巣の中にある物を握って取ってきたが、それは子安貝ではなく、古糞であった。

⑤「我、物にぎりたり。今はおろしてよ。」…　腰なむ動かれぬ。されど、子安貝を、ふと握り持たれば、うれしくおぼゆるなり。…　御手を広げたまへるに、燕のまり置ける古糞を握りたまへるなりけり。（五四頁）

傍線部のように、この場面には「握る」という言葉が何回も出てくる。それも手のひらの中に物が入っている光景なのである。また、中納言が出された題は「燕の持たる子安の貝」なので、燕の体内に子安貝が入っている光景が想像される。さらに、「貝」というと、二枚組などの貝殻の中に貝の身が入っている光景が浮かぶであろう。

中納言が物を握ると、家来たちが綱をひっぱって籠を降ろ

したが、ひっぱり過ぎて中納言が鼎の上に落ちてしまった。中納言の腰は唐櫃の蓋がなかなかぴったりと合わないように折れてしまった。

⑥唐櫃の蓋の入れられたまふべくもあらず、御腰は折れにけり。（五五頁）

「唐櫃」もその中に何かを入れるものである。中納言石上麿足の物語には、ある物がある物の中に入っている光景が多いのである。

中納言石上麿足の物語には、季節の変り目や「中」を表すものが多く存在する。季節の変り目と「中」は「土行」が配されているものなので、中納言の場合は「土行」とつながりがあるのだと考えられる。

以上、五人の求婚者と五行とのつながりを考察してきた。石作の皇子は「水行」、くらもちの皇子は「金行」、右大臣阿倍御主人は「火行」、大伴御行の大納言は「木行」、そして、中納言石上麿足は「土行」とつながりがあるようである。このように、五行とつながりがあることにより、何かが暗示されているのではないか。

人間の世界の人である五人の求婚者と理想の世界の人であるかぐや姫とははっきり区別されていることが、多くの論稿の中で指摘されている。例えば、桜井祐三氏によると、「竹取物語のころになると、もう人間とそうでないものとは、はっきり区別がついたようだ。そして、人間としてできることの限界も、見定めることができたようである。竹取物語は、神や精霊の世界に人間を引き込もうとはせずに、人間はあくまで人間として扱って、人間と人間以上のものとの間に越えられない一線のあることをくり返し強調している。」とある。[11]かぐや姫が五人の求婚者の誰とも結婚しなかったのも、理想の世界のかぐや姫と人間の世界の五人の求婚者とを区別するためなのだと考えられる。

五人の求婚者は五行とつながりがある。五行は自然界や人間界の万物を生成し、人間界のあらゆる物に配されているので、彼らは五行とつながりがあることによって人間性を強調されているのだと考えられる。そして、人間性を強調されていることにより、彼らは理想の世界のかぐや姫とは区別されているのだと考えられるのである。

おわりに

以上、『土佐日記』と『竹取物語』における五行の象徴について考察してきた。『土佐日記』は五行思想の影響を受けており、五行に配される五色がそれぞれ作者の気持ちや旅のありさまを表すことに象徴的に使われていることが分かる。そして、『竹取物語』では、五人の求婚者は五行とつながりがあり、そのことによって人間性を強調されていると考えられる。『土佐日記』と『竹取物語』には、五行が配されるも

のが頻出し、その象徴的な機能が明確に見て取れる。五行思想は平安朝の人々の精神生活に影響を与えるだけではなく、平安文学にも影響を及ぼし、特に、五行を象徴的に表す文学的技巧がよく使われているのだと主張したい。

＊本文の引用は、新編日本古典文学全集『土佐日記』と『竹取物語』に拠った。

注

(1)Ferber, Michael. A Dictionary of Literary Symbols. Cambridge: Cambridge University Press, 1999. p.89.
(2)前掲注（1）28頁
(3)Campbell, G.L. translated. A Dictionary of Chinese Symbols: Hidden Symbols in Chinese Life and Thought. Newyork: Routledge & Kegan Paul,1986. p.313.
(4)前掲注（3）249頁
(5)新編日本古典文学全集『土佐日記』29頁
(6)前掲注（5）42頁
(7)前掲注（5）54頁
(8)今井源衛「浮舟の造形―夕顔・かぐや姫の面影をめぐって」『源氏物語の思念』笠間書院・1987
(9)稲賀敬二「求婚者四人の「竹取物語」」『研究講座　竹取物語の視界』新典社、1988・249頁
(10)奥津春雄「阿部御主人の人間像―火鼠の裘の成立」『竹取物語の研究―達成と変容』翰林書房、2000
(11)桜井祐三「竹取物語について」『日本の古典文学3　竹取物語　土佐日記　伊勢物語』さえら書房、1975・130頁

参考文献

中嶋洋典『五色と五行』世界聖典刊行協会、1986
林望『すらすら読める土佐日記』講談社、2005
村瀬敏夫『宮廷歌人紀貫之』新典社、1987
吉野裕子『陰陽五行と日本の文化』大和書房、2004
吉野裕子『易・五行と源氏の世界』人文書院、1999

(Suwanrada Attaya　チュラーロンコーン大学助教授、本学外国人招聘研究員、国際交流基金フェロー)